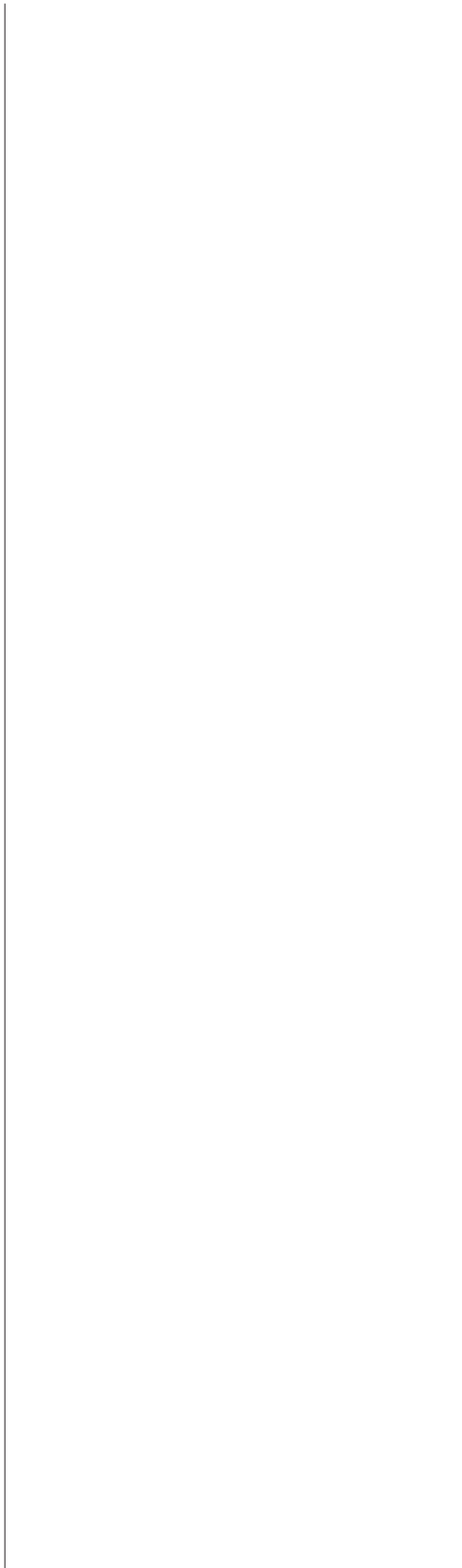


建築のこと、街のこと、
建築家はかく語りき。

聞き手／高田尚志(高田織物株式会社 専務取締役)

写真／インイコウジ



部空間ですが、建具によって内部化した部屋に変化しています。その変遷を追うことで、外の空間を建物の内側にどう採り入れるかの試行錯誤を垣間見ることができました。ベランダと似たような空間って、日本建築でいうと縁側ですよ。『聴竹居』ではサンルームというカタチで外と内が融合している。これを『縁側』と図面に名付けているんですけど、機能的には非常に面白い空間です。冬はそのままサンルームで、夏は窓をすべて開けると半分外のような空間になります。隣にすぐにリビングがあって、外の冷たい空気を引っ張ってくる、素晴らしく機能する空間です。実は自分も、普段から外との関係を大切に設計しています。そういった共通する部分も徐々にわかってきたので、『気負わずやればいいということかな』という心境になることができました」

変態なみのこだわりの職人たち、美しい家はこうして生まれる。

高田「プレッシャーはありましたか？」

前田「それはありました。コストも無尽蔵じゃないし、またいろんな人がいろんなことを言いますしね。たとえば、歴史に詳しい先生が手をつける前の状態のときに見てくれて、『前田さん、この土壁は貴重だね。真壁の建物でありながら上部の大屋根下の壁面は土蔵造りになっていて、断熱性能を高めている。この温熱環境の考え方こそ、まさに藤井厚二だ。』とか。で、こっちは『ああ、そうですか？』みたいなね(笑)。ここに入ってくれた左官さんが素晴らしい技と意思を持った職人さんで、その壁の話をしたら、『それは是非使いましょ』と。崩れた土を土嚢袋でとっておいて、漉して再利用したのがこの壁です」

高田「それはスゴい！」

前田「その左官さんが、当時の土壁と敷地周辺で採れる土を混ぜて、何十種類ものサンプルを作ってくれて。普通はそんなことをお願いしたら鬱陶しがられます。でも、その左官さんは現場に来ると、こちらから言い出す前に、すでにサンプルを数10種類ほど用意していて、ひとつひとつ説明してくれるんです。ちょっとしたプレゼンですよ。で、裏でサンプルを塗って乾いたくらいの時間になって、『これはやっぱり違うな』とか言ってるんです。でも、しばらく寝かしていたら、色あいが落ち着いてきてものすごくいい材料になってということがありました。お酒みたいですよ」

高田「面白いですね、その左官さんは地元の方ですか？」

前田「はい、地元福山の方です。ここでの仕事が初めだったんですが、この仕事以降も付き合っていたいただいて、ちょうど3日前にも、その親方の工場にいたんです。『なんか、いいのいないですかね？』ともちかけると、そこから『じゃあこんなの？』とキャッチボールが始まる。それがまた楽しい」

高田「いいですね、ここはそんなエキスパートたちが集まってチームで作業にあたっていたんですね」

前田「まさにそう。そして、そういった人たちが、いわばぼくの財産でもある」

高田「本当にそう、人って財産ですね」

前田「もちろん、ビジネスなんですけどね。それと同時に職業への探究心というか、そういった姿勢を常に持っている人って、話しているとわかるじゃないですか。そっちの人だと、鬱陶しがられて当然のような話も、逆に嬉しそうに聞いてくれる。で、こっちはその人と話しながら、『ああ、この人、変態だな』と(笑)」

高田「そうなんです、腕のいい職人さんっ

て、いい意味で変態な人が多いです。豊屋さんと同じようなところがあって、『なんでもいいから作って』と言われるとまったく気乗りしない。でも、その人をくすぐるようなポイントがあって、そこをおさえたいというリクエストがこようものなら、『だったらオレ、ひと肌脱いじゃうけど』みたいな人が結構いる。失礼ですが、前田さんも、どちらかというと変態なのでは？」

前田「あ、はい、そうですね(笑)。でも、藤井厚二はもっと変態ですよ。ここで使われているネジを見ていただくとわかるんですが、昔のネジってみんなマイナスなんですよ。で、京都の『聴竹居』は、このネジがすべて水平に揃っている」

高田「最後の締め調整ですね」

前田「はい。それにならって、ここでも同じことをやってみようと思ったら、いまはもうマイナスのネジがない」

高田「そうなんですか」

前田「ええ、ないんです。でも、ここで使われていたネジは『聴竹居』までは揃っていない。この家は藤井厚二のお兄さんの家別荘のサンルーム増築なので、ちょっと手を抜いた!?かもしれないですね(笑)。『聴竹居』は、それこそ大工の酒徳金之助棟梁と寝食を共にして、藤井厚二が納得のいくまで作るという共同の作業です。そういうのって、家に表れるんです。美しい住宅ですよ」

変わっていく地方都市の姿、提言していくのが建築家の役割。

高田「藤井厚二が福山出身であることはどのように感じていらっしゃいますか？」

前田「同じ福山出身の建築家として、とても誇りに感じています。もっと広く知ってほしいですね」

高田「前田さんは、ご出身の福山をいまも

後山山荘

福山出身の建築家・藤井厚二が兄・与一右衛門のためにつくった昭和初期の輦別荘。輦の浦を一望する高台の上にある。京都・大山崎にある『聴竹居』と同じデザインのサンルームがあり、天井に排気口があるなど、藤井厚二の環境工学を体現している。見学も可能。詳細はホームページを参照。
(<http://ushiroyamasansou.com/>)



拠点として活動されている。福山には特別な思いのようなものが?」

前田「福山を拠点にするというのは、最初は意識していたかというそうじゃなかったと思いますね。学生時代は東京に住んでいたの、そのまま当時好きだった建築家の事務所に行きたかったくらいですから。でも、一度(東京から)こっちに帰ってきてやっていくうち、知っているようで知らないことが多いと気づくわけです。たとえば東京の友人を連れて輦の浦へ行って、あたかも知っているかのように振舞ってしまうんですが、実はあまり深く知らない。知らないということに気づいてからですね、福山という街のいろんなことに興味をもちはじめたのは。そうやって福山で仕事をしているうちに、今度は街と建築が同じ世界にあるということに気づいたんです。建物を建てるのって、敷地のなかで基本ひとつですよ。でも、そのひとつが街の景観をつくっている。また、いくらい家を建てても、街が廃れたら、その建物の魅力は半減します。ある意味、当たり前のような事ですが、街と建築は同体なんです」

高田「倉敷も福山とほぼ同じ規模の街ですが、最近では地方都市が同じような顔になっていると思いませんか?」

前田「そうですね。ショッピングモールが各都市にあって、それによって商店街が瀕死の状態にあるという。ぼくたち建築家は、街に何ができるのかというのを発言しないといけないと感じています。たとえば、景観を汚すような風潮はやめましょう。ショッピングモールのような商業施設は、悪く言えば、ハリボテ建築です。一過性の建築といったらいいか、30年、50年と時間を紡ぐということがない。それでは文化にならないですよ。そんな施設を中心に街が形成されるというのは、街のあり方として非常によろしくない。そういう傾向に対して、なにが提言できるのかを考える、それが建築家の役割でもあると思います」

高田「街にからめて、いまなにか進めている活動があるんですか?」

前田「福山商店街のプロジェクトに5年ほど前から携わっています(『とおり町Street Garden』)。具体的な取り組みとしては、老朽化したアーケードを取り払いながらも、昔の柱を補強して残し、そこにステンレスワイヤーを架けることによって電柱や高圧線を見えにくくしました。通りに対して店の間口がいっぱいで、さらに通りの前までせり出してきて軒を連ねる、これが商店街の姿だと思うんです。だから空き店舗が多い歯抜けの状態

だと、この連帯感が出ない。やっぱ連帯感みたいなものっていうのは必要なんじゃないかなあと思って。それで柱のところに植物を植えて、店の人たちが育ててもらうことになりました。庭を共有するような感覚です。昔の連帯感とはちょっと違いますけど、まあこれも新しい商店街のカタチということで」

高田「デザインですね?」

前田「そうですね。一種の環境づくりです。でも、この植栽が面倒くさいと言われて、なかなか一筋縄ではいかない(笑)」

高田「実はぼくも庭の水やりが嫌いで、全然やらなかったんです(笑)。でも、ある日父から『おまえは庭の緑を見て癒されることはないのか?』と。あると答えたら、『なにに見るだけでいいのか?』と言われました」

前田「面白い会話ですね、素晴らしい。環境がいいと、コミュニケーションが生まれると思うんです。商店街では是非そうやってほしいですね。椅子を店の前に出したりして、店の人同士やお客さんが椅子に座ってたわいもない話をしたり、一緒にお茶を飲んだり。そこからなにかが生まれるとぼくは信じています」